

2017 年よりインクカートリッジ里帰りプロジェクトを通じて、日本野鳥の会の保護活動へのご支援をいただいています。この報告では日本野鳥の会の 2020 年度の保護活動の成果やトピックをご紹介します。

1 絶滅が懸念される野鳥の保護活動

シマアオジ



(写真：松屋/PIXTA)

夏になると東南アジアなどから北海道の草原に飛来する渡り鳥です。近年、海外での乱獲により世界的に個体数が激減し、国内でも昨年確認できたのは 21 つがいと、最も絶滅が危ぶまれる種です。

トピック 地元の自然保護団体と協働して、北海道北部のサロベツ原野でシマアオジが生息する土地 14.8ha を購入し、保護区にすることで恒久的に生息環境を保護しました。

詳細はこちら→ <https://www.wbsj.org/lp/birdmate/>

ナベヅル・マナヅル



かつては、冬に日本各地の水田地帯に飛来していましたが、水田の近代化や湿地の減少により越冬地が減少し、現在、鹿児島県出水市地域での集中化による絶滅リスクが問題になっています。

トピック 地域と協働して越冬環境を整備したり、自然と共生する持続可能な地域づくりを行うことで、越冬地の復元を目指しています。昨冬は愛媛県でナベヅルが約 50 羽、熊本県でマナヅル約 30 羽が越冬しました。

風力発電への対応



風力発電は、発電時に CO2 を出さないクリーンエネルギーとして日本各地で導入が進んでいますが、立地場所が希少な野鳥の生息地や飛翔ルートと重なることが多く、野鳥の衝突死や生息地の放棄が起きています。

トピック 人の快適な暮らしと自然保護を両立するには、開発可能な場所と保護すべき場所を区分けする考え(ゾーニング)が必要です。希少種が多い北海道北部をモデル地域に、風車の影響を受けやすい野鳥の生息場所や密度の高さを表す地図(センシティブリティ マップ)を作成しました。

2 普及活動

オンライン探鳥会の開催



トピック コロナ禍での新しい自然観察の方法として、オンラインで探鳥会(野鳥観察会)を開催しました。北海道のタンチョウの越冬地や東京湾の干潟など全国で合計5回実施し、約 250 人の方が参加しました。家にいながら各地の野鳥を観察でき、野外での観察会で時々起こる“自分だけ鳥を見逃した…”が起きないなど、オンラインならではの良さがありました。

ツバメの子育て応援



(写真：掛下尚一郎)

水田や巣作りに適した日本家屋の減少、繁殖を見守る人が少なくなったことなどが原因で、近年ツバメが減少しています。

トピック ツバメの巣の下にフン受けを設置したり、施設利用者に頭上への注意を促す看板を設置するなどして、ツバメと共存している企業や団体5社に感謝状をお贈りしました。その様子が地元の新聞などに取り上げられ、保護の取り組みが広く紹介されました。